

望月 由起 著

『現代日本の私立小学校受験』

ペアレントクラシーに基づく教育選抜の現状』

小針 誠 (同志社女子大学)

本書は現代日本の私立小学校の実情と受験体制について実証的に解き明かした研究成果である。教育(学)研究において「私立小学校」というテーマ自体が研究対象として取り上げられ、検討されることが少なく、その実態は十分に明らかにされてきたとは言いがたい。日本の学校教育制度の全段階のうち、私学の占める割合が最も低いのが初等教育段階(小学校)であり、学校数・児童数ともに、1%程度を占めるに過ぎないということも影響しているのだろうか。そのため、本書のような一般書の形で、私立小学校や入学志向の問題を学問的・実証的に解き明かし、刊行されたことは誠に喜ばしいこととして率直に評価したい。

本書の構成は以下の通りである。

序章 問題の所在

第1章 私立小学校に通う子どもたち

第2章 現代の私立小学校

第3章 私立小学校の多様性 「小学校卒業後の進路」に着目して

第4章 私立小学校受験の現状

第5章 小学校受験の影響に対する認識

第6章 私立小学校受験家庭の教育観・進路観・社会観

終章 今後の課題と展望

本書は2つの分析視角に基づいており、それぞれの問題が解き明かされている。

第一の分析視角は、第1章～第3章を中心として、現代の私立小学校の実像やその多様性に関する点である。『学校基本調査』『文部(科学)統計要覧』『学校総覧』などの公的資料、または、各小学校の学校案内やホームページなどを幅広く渉猟し、私立小学校の量的な変化や卒業後の進路

(併設上級学校への進学等) などに関連させて明らかにしている。

第1章では、私立小学校の高額な授業料と家庭でもそれに見合った経済資本が求められるにも関わらず、私立小学校の数は顕著に増加しているという。第2章では、私立小学校の地域的な偏在について、確かに私立小学校は一部の大都市圏に集中しているものの、人口規模の大きくない地方も含めて点在していることやその多くが中等・高等教育機関を併設し、高校ないしは大学・短大まで進学できる、いわゆるエスカレーター型進学システムを採用しているなどの特徴が浮き彫りにされる。第3章では、上級学校を併設していない、もしくは性別により進学機会が与えられないなど、約1/4の私立小学校は上級学校に進学できないという。

第二の分析視角は、後半の第4章～第6章を中心に、首都圏または関西圏といった大都市圏において、私立小学校の入学を志向する家族（以下、受験層と略記）の実態について、質問紙調査の分析結果をもとに、ペアレントクラシーに基づく教育選抜の視点を援用して明らかされる。ペアレントクラシーとはペアレント（親）＋クラシー（支配）、すなわち本人の能力・努力などの近代「業績」主義（メリトクラシー）に対して、家庭の経済力や親の教育意識（意欲や選好）によって、子どもの教育達成に格差や不平等が生まれるなど、現代（日本）社会における新しい「属性主義」の出現を指す概念である。本研究の興味深い点は、いわゆる計量分析のみならず、自由記述回答なども適宜提示されているところにある。そこからは数字だけでは読み取れない、受験層の受験戦略・教育戦略のリアリティが浮き彫りにされる。

第4章では、私立小学校受験に対して、誰が、なぜ、どのように取り組むのかという家族問題としての小学校受験の実態が分析され、都市部の高学歴・上層ホワイトカラー層が母親の就労を伴いながらも、家庭の経済力を背景に、私立小学校受験に積極的に参入しているという。また、受験する理由についても「一貫教育」「高学歴ルート」「公立小不信」「国・私立小の教育環境・評価」「他者の薦め」などが確認され、昨今では「一貫教育」に比べて「高学歴ルート」志向が高まる傾向にあることを示した。第5章では、一般家庭調査を併用して、小学校受験とは直接関係のない家

庭を対象とした調査をもとに、小学校受験に対して抱くイメージを確認したうえで、その「イメージ」と受験層の意識との間の「現実」との差異を明らかにしている。小学校受験について「親の自己満足」とみなされる傾向に対して、受験層にとっては「親の精神的負担」と認識するなど、興味深い知見が提示されている。最後の第6章では、「小学校受験家庭の教育観・進路観・社会観」について、5章と同様に、一般のイメージと受験層の現実・認識との比較を通じて分析されている。受験層の家族の特徴として、子どもの教育環境全般に関心を持ち、それを積極的に捉える教育観があること、また進路観や社会観においても、親自身がそうであるように子どもに対しても高学歴を望みつつ、日本の学（校）歴社会を重視したり、個人の努力が報われるべきであるなどの社会観を有し、教育格差や受験競争そのものを強く肯定する傾向があることも示されている。

なお、本書の内容に関する問題点・課題等については、稿をあらためて、日本子ども社会学会『子ども社会研究』第18号に、書評を寄せた。あわせて参照頂ければ幸いである。

(学術出版会刊 2011年11月発行 四六判 232頁
本体価格2,800円)